

二本松少年隊

二本松城の本丸の南西には、年上の男性の指揮の下、迫りくる敵と戦う準備をしている少年たちの一団を描いた青銅製のレリーフが立っています。このレリーフは、1868年の戊辰戦争中に二本松城が攻撃を受けた際、その多くが二本松城を守ろうとして命を落とした少年隊の追悼として、地元の彫刻家橋本高昇によって制作されました。

戊辰戦争は、西日本の有力諸藩を中心とする連合軍と徳川幕府との間で起こった内戦です。京都の鳥羽・伏見の戦いから始まり、西側同盟は瞬く間に東側に侵攻しました。幕府側の同盟である二本松は、近いうちに戦わなくてはならないことを知っていました。

戦争中、幕府は兵力不足を解消するために15歳以上の新兵を受け入れ始めました。しかし、二本松藩では古くから武士の入隊年齢に2年加算する慣例がありました。この規則が適用されたことにより、実際にはまだ13歳の子どもたちも二本松を守るために入隊することとなりました。当時の日本の年齢計算方法により、中には12回目の誕生日を迎えていない新兵もいました。

13歳から17歳の少年で構成された新設の部隊は、江戸で学んだ22歳の大砲術専門家、

木村銃太郎の指揮下に置られました。青銅のレリーフは、彼が若い兵士たちを訓練した射撃場の場所に立っています。

1868 年 7 月 29 日、西日本連合軍が二本松を攻撃しました。侵略軍は最新の武器を持ち訓練を受けた 7,000 人の軍隊でした。二本松を防衛したのは少年隊の隊員 62 名を含むわずか 1,000 名の兵士でした。少年たちの多くは鎧を着けずに戦うことを余儀なくされ、記録によると、刀の刃が長すぎて各自が自分の刀を抜くことができなかったため、二人一組の少年が互いの剣を抜き合っていたといえます。

戦いは正午を迎える前に終わりました。二本松城には火が放たれ、少年隊の隊員 14 名と他の兵士数百名が死亡しました。木村は戦い中命を落としました。

このエピソードは二本松の地域社会にとって非常に衝撃的であったため、その後数十年間、少年隊について公に議論されることはほとんどありませんでした。この沈黙が破られたのは、1918 年の戊辰戦争終結 50 周年を記念するイベントにおいて、元少年隊隊員の水野好之が自らの体験を記した自費出版の小冊子を配布したときでした。これにより、他の生存者や家族が名乗り出て証言や文書を提供するようになり、歴史家が事後的に物語をまとめることが可能になりました。にほんまつ城報館のマルチメディア展示では、この研究の成果が紹介さ

れています。

1996 年、橋本高昇のレリーフに描かれた場面が、箕輪門の外に建てられた銅像群を通じて再現されました。これらの像は高昇の息子である橋本堅太郎によって彫刻されましたが、この作品には息子に戦で着せるために大人の着物を直している母親が加えられていることが注目に値します。